

## 研究ノート

## 南アフリカ経済史研究の課題

北川 勝彦

## 要 約

本研究ノートは、1980年代中頃から1990年代末にいたるまでに発表された南アフリカ経済史に関する諸研究の展望を試みたものである。主として『南アフリカ経済史ジャーナル』(*South African Journal of Economic History*)、『南アフリカ歴史ジャーナル』(*South African Historical Journal*) および『南部アフリカ研究ジャーナル』(*Journal of Southern African Studies*) に掲載された諸論文を調査研究した。南アフリカ経済史の解釈をめぐる「リベラル派」と「ラディカル派」の論争をふりかえり、経済史研究で主として取り上げられた諸問題—現代南アフリカ経済論、農業と農村社会の変化、鉱業と製造業、19世紀植民地経済、奴隷制社会などを考察するにあたって重要と考えられる諸研究を順次整理した。現在、南アフリカ経済史研究は、1880年代から両大戦間期にかけての工業化をめぐる問題に焦点があわせられているように思われる。

キーワード：「リベラル派」、「ラディカル派」、ケープ奴隷制社会、ナタール植民地、鉱業史、出稼ぎ労働、経済危機論争

経済学文献季報分類番号：04-10、04-50、07-40

## はじめに

最近四半世紀の間、南アフリカほど多くの人々の関心を集めてきた国もないであろう。たとえば1976年のソウェト蜂起、1980年代中頃の経済制裁と国内経済の停滞、1994年のマンデラ政権の誕生と1999年のタボ・ムベキ政権への移行。その一つ一つが広く世界の人々の注目の中で進行したものであった。脱植民地化の世界においてひとつのアノマリーとされてきた南アフリカは、現在、さまざまな痛みをともないながらも、国際社会の懸念と期待の下で民主化過程を歩んでいる<sup>1)</sup>。

この同じ時期に、南アフリカの過去に関する研究も、また、これまでにはない広がりや深まりを持った変化を経験することになった。それは、多くの新しい学問的成果が世に問われ、ヨーロッパ、アメリカおよびアフリカの各地域では南アフリカ史のコースが提供されるようになったということにも表れている。学問研究の量的増大を背景にして生まれしてきた研究成果は、現代南アフリカの形成に関する理解の仕方を著しく変化させた。I. スミスの表現を借りれば、それは「南アフリカ史研究の歴史に革命」をもたらすほどのものになったと言われている<sup>2)</sup>。

このような南アフリカにおける政治経済の新展開と内外の学界の動向を反映して、わが国におい

でも南アフリカの歴史と現状に関する諸研究が、多様な視角からおこなわれるようになった。それらの論著に接して気がつく点は、この新しい動向がこれまでのそれとは異なった問題意識と研究方法にたって研究対象が設定されているということである。それだけに、今こそわが国においても南アフリカ史研究の成立しうる理論的および現実的意義はなにかを問う必要があるだろう<sup>3)</sup>。

本研究は、この新しい学問研究の潮流の中で、とくに南アフリカ経済史研究に関するいくつかの動向を紹介しようとするものである。具体的には、1980年代後半から1990年代後半に刊行された南アフリカ経済史の著作を中心に研究動向の展望を試みる。この時期の諸研究がどのようにして出現してきたかを理解するには、まず何よりもそれに先行する一般的な見解について簡単に触れておく必要がある。

さて、初期の南アフリカ史研究は、そのパースペクティブにおいて多様ではあったが、白人移民の活動に主たる関心が向けられていた。アフリカーナのナショナリストの歴史家たちは、トレッカーやその子孫の成果を声高に叫ぶ傾向があった。一方、イギリス系の歴史家たちは、イギリス帝国政府やその入植者の役割を強調した。ヨーロッパの場合と同様に、20世紀の初期に書かれた多くの歴史には、政治的事件、すなわち「国民国家の形成」を論じるものが多かった。そうしたアプローチは、たとえばミュラーの著書に見られるように、現在でも南アフリカでは一つの学派を形成している<sup>4)</sup>。

南アフリカ史における基本的な争点の一つは人種問題であり、それが人種隔離体制の諸原因の一つであったことは広く知られているところである。20世紀の中葉になると、「リベラル派」の歴史家たちは、人種隔離(アパルトヘイト)の経済的および社会的背景について多様な議論を展開した。それにもかかわらず、これらの著者の多くは、南アフリカを二つの異なる社会を含む「二重経済」として描いた。すなわち、一方では、白人の居住する都市と資本主義農業システムの発展があり、他方では、アフリカ人の居住する農村の貧困と停滞があると論じられたのである。また、アパルトヘイトは、基本的にはアフリカーナの人種差別による不幸な歴史として説明された。それは、初期のケープ植民地のフロンティアで生まれ、「グレート・トレック」によって内陸に移植され、1948年の国民党の勝利の中で再び表面化した、というのである。こうした議論は、「リベラル派」の歴史家の手で刊行された『オックスフォード版南アフリカ史』(*Oxford History of South Africa*, 1971)の基調となっている<sup>5)</sup>。

他方、この『オックスフォード版南アフリカ史』は、南アフリカ史に対するアプローチのもっと根本的な変化を反映していた。それは、1960年代末と1970年代におけるアフリカ史研究の新展開の影響をうけていたからである。すなわち、植民地支配からのアフリカの独立に対応して、歴史家たちはアフリカ人社会内部の動きを植民地政策の付属物として描くのではなく、それ自体に焦点をあわせるようになってきた<sup>6)</sup>。したがって、南アフリカ史をイギリス系およびアフリカーナの移民や両者の対立としてみることもはやできなくなったのである。

しかし、『オックスフォード版南アフリカ史』は、出版後、新しい若手の歴史家たちの批判をうけ

る。彼らは、アパルトヘイトを前工業化時代の植民地のフロンティアにおける不合理な人種差別から説き起こすのではなく、南アフリカの工業化の直接の所産として説明した。この「ラディカル派」の修正論によれば、人種隔離は、具体的には、初期の産業—とくに鉱業と資本主義的農業—を育成するために発明されたことになる。「リベラル派」の「二重経済」概念とは対照的に、「ラディカル派」は、多くのアフリカ人の貧困と剝奪を南アフリカの産業システムに不可欠な要因と見た。安価な労働は、南アフリカ経済の基本であり、人種隔離は、白人による一般的な人種支配というよりもむしろ資本家による階級支配の結果から生じたと説明されることが多くなってきたのである<sup>7)</sup>。

このようなアプローチは、南アフリカの過去についての理解の仕方を大きく変えていった。したがって、研究の焦点は、今や、19世紀初期における前工業化時代のトレッカーの共和国やイギリスの植民地社会よりも1880年代以降のウィットウォーターズランドにおける初期の工業化におかれている。その結果、さまざまな時期と地域の具体的な階級形成の特質が認識されるようになった。すべての白人とすべてのアフリカ人が同じ経験をもったのではない。たとえば、「アフリカーナ・ナショナリズム」は、多様な階級の利害を統合する手段として1930年代に意識的に作り出されねばならなかったし、アフリカ人の小農部門は、19世紀末には新しい市場機会に対応できたが、その後、白人農民と都市の雇用労働を求める白人との競争のために破壊されたのである<sup>8)</sup>。

このように、過去四半世紀にわたる研究を通じて、南アフリカにおける個人とコミュニティの多様な歴史的経験がいまや認識されるようになった。以下では、まず、南アフリカ経済の過去の研究に密接な関係があると考えられる現代南アフリカ経済に関する諸研究と南アフリカ経済のダイナミズムを規定してきた独占企業の研究を紹介する。次に、南アフリカ経済の展開に不可欠な要因であった農業と農村社会の変化、鉱業および製造業を扱った諸研究に触れると共に、19世紀の植民地経済史に関する諸研究についても展望を試みる。最後に、最近の研究動向を再び研究史の中に位置づけることで、今後の南アフリカ経済史研究のいくつかの課題を提示しておきたい。

## 1 現代南アフリカ経済論

南アフリカ経済史研究にとって、20世紀末のアパルトヘイトの崩壊と経済危機の本質をどのように理解するかは、将来の一つの重大な課題になるであろう。現在でも、この危機の本質を分析したいくつかの研究があり、それぞれが南アフリカの過去についての見解を表明している。

ブラックとスタンウイックスの研究によれば、南アフリカ経済は、ほぼ40年にわたる間断のない成長の後、1970年代中頃に構造的な危機に入った。その特質は、製造業部門の停滞、高インフレ、輸出の減退、ランドの下落と低い外貨準備、低貯蓄と高失業で表現することができる。国内市場向けの消費財の生産は、人種差別による所得の不平等な分配に著しく制限され、生産と雇用の拡大は、政府の保護政策のためにかえって競争力を欠くことになった小規模な製造業部門の再建（活性化）に期待せざるをえない。現在でも、アフリカ人の小規模な企業活動は、思うに任せないのが実情で

ある。1970年代中頃の 아프리카人の賃金の増加やアパルトヘイト体制下でのアフリカ人の半熟練および半専門的職業への参加によっても財およびサービスの市場を十分には拡大できなかった。経済のパフォーマンスは、深刻な構造的失業によって圧倒されたからである。したがって、経済危機の解決策は、所得と資産の再分配だけでなく、韓国で実施されたような諸政策—合理化計画、選択的関税政策、国内の技術開発力の強化—にそった国家主導の産業政策による他はないということになる<sup>9)</sup>。以上の分析を承認しながら、現代の経済危機は、南アフリカ経済を支配的する「鉱物・エネルギー複合体」(mineral-energy complex)に深く根ざしていると論ずる立場がある。ファインとルストムジェーの近著では、この複合体と金融機関との融合の結果、産業が自らの生産力と競争力を強化するためのイノベーションにコミットしなくなったところに危機の原因があると考えられている<sup>10)</sup>。

これらの見解とは対照的に、南アフリカ経済における構造的危機の存在を否定する立場がある。すなわち、これは、アパルトヘイト体制下の経済成長を発展途上国との比較に準拠して評価する立場である。このパースペクティブをとるモルによれば、南アフリカ経済の成長の遅れは、実際にはアパルトヘイト体制の確立とともに始まり、1970年代末の経済不況と1980年代の経済制裁によって顕著になったと考えられている。これとは異なり、アパルトヘイト体制初期の経済成果をポジティブに評価する立場では、1980年代の経済衰退の原因は、むしろこの時期に顕著になってきた政治的孤立化、軍事化、高率課税、低貯蓄、およびマネタリストの政策に帰せられる。したがって、このような見解によると、少なくとも南アフリカ経済の構造それ自体には何らの欠陥も問題点もないということになる<sup>11)</sup>。

ところで、今日の南アフリカ経済においては、独占ないし寡占企業の動きが大きな影響力を及ぼすようになっていることにまず注目する必要がある。ジョーンズの指摘によれば、1987年には、4つの巨大財閥企業—Sanlam, Mutual, Anglo American Corporation, Rembrandt—は、ジョハネスバーグ証券取引所に上場された全企業の83%を支配していた。しかし、今日までのところ南アフリカの巨大企業の歴史に関する研究はそれほど多く見られるわけではない。南アフリカ経済が現在の方向へむかう歴史的背景を金融史、銀行史、企業経営史の立場から検討する必要があるだろう。ジョーンズやウエップの近業によれば、初期の南アフリカ銀行業は、2つの帝国銀行—Standard Bank と Barclays Bank—に支配にされていた<sup>12)</sup>。1980年以前の両銀行の主要な競争相手は、オランダ系のネッドバンク(Nedbank)とアフリカーナの貯蓄銀行であったフォルクスカス(Volkskas)である。その点は、フェルホフの諸論稿に示されている<sup>13)</sup>。しかし、これらの銀行は、大陸型の投資銀行ではなかった。したがって、長期にわたる投資を必要とするような鉱業への融資と経営は、しばしば南アフリカの企業モデルとなった言われる鉱山開発金融会社が担ったのである。残念ながら、これらの会社の経営史についても多くの研究が書かれているわけではない。アングロバル社(Anglovaal)のように初めから製造業に経営を多角化していった企業もあるが、インニスの研究から知られるように、経営の多角化はようやく1960年代と1970年代に生じ、とりわけアングロメリ

カンが指導的な立場にあった。一方、はやくも1845年にケープタウンで営業を開始した保険会社のオールドミューチュアル（Old Mutual）やアフリカーナ系の企業であるサンラム（Sanlam）も、他の分野との連携で足場を固めようとした<sup>14)</sup>。

南アフリカにおいて、民間企業間の相互の連携あるいは民間企業と準国営企業との連携がはじまるのは、第二次世界大戦中および戦後のことであった。サンラムは、エスコム（ESKOM）と契約し、同時に石炭業とダイヤモンド業への参入を果たした。クロスの研究に見られるように、アングロアメリカンは、南アフリカ鉄鋼公社（ISCOR）の独占に挑戦している。また、クロンプトンやフリーとスミスの労作では、セメント、石油化学、材木、パルプ、製紙などの諸産業は、コングロマリットの間で分割所有されたことが示された<sup>15)</sup>。

1980年代になると、アメリカとヨーロッパの企業は、経済制裁のために南アフリカへの投資を停止した。アングロアメリカンは、フォードやパークレーのビジネスを買収し、サンラムは、自動車、コンピュータ機器、エレクトロニクスの産業分野に利害関係を持つようになった<sup>16)</sup>。しかし、フェルホフの研究によると、1980年代の南アフリカ経済に見られた新展開の中心は金融部門であった。銀行業の規制緩和によって、銀行・住宅金融会社・保険会社の壁が除去されると4大金融グループが生まれ、それぞれがコングロマリットと関係をもったのである。保険会社のサンラムは、獲得した企業あるいは経営分野を直接支配しようとした。金融利害の支配下におかれたコングロマリットは、企業の革新を怠るとの批判が聞かれるが、この点を含めて、南アフリカにおいて展開された企業の連係と融合の歴史とそれが南アフリカ経済史にもつ意義を経営史ないし経済史の立場から今後研究を深めて行くことが必要であろう<sup>17)</sup>。

## 2 農業と農村社会の変化

南アフリカ農業の近代化は、工業化の原因というよりもその結果であったと論じられることがある。工業化の比較史という観点から農業の役割をどのように評価するかという点で、南アフリカ経済史は興味深い。よく知られているように、白人の農業は、鉱業への課税と食糧の高価格という犠牲のもとで補助されてきた。しかし、これには、農村のアフリカ人のプロレタリア化と貧困化がともなったことを急いで付け加えておく必要がある。

白人農業に対する政府支援に関する研究は、資料面で比較的恵まれた分野である。この分野の研究としては、1930年代の不況期の農業支援を検討したミナルの論文がある。白人農業のうちでもっとも資料が整っているのは、ナタールの砂糖業であろう。この産業は、最初は巨大な工場を所有する「砂糖貴族」(sugarocracy)、次いで彼等を買収した都市のコングロマリットに独占されたという歴史をもつことが、リンカーンによって明らかにされた<sup>18)</sup>。また、農業と環境の歴史を扱ったペイナートの論文も、今後の一つの南アフリカ史研究の方向を示唆するものとして興味深い<sup>19)</sup>。

白人農業の発展の影で、アフリカ人農民の歩んだ歴史に関していくつかのすぐれた研究が見られ

た。20世紀初頭には土地へのアクセスを確保していたアフリカ人農民は、何のこだわりも抵抗もなくプロレタリア化していったのではない。そのような点を明らかにしたいいくつかの研究を以下にあげておこう。当時もっとも裕福であったアフリカ人農民は、ハイベルトの白人農場でメイズを栽培していた分益農民であった。彼等のプロレタリア化に対する抵抗は、南アフリカ社会経済史研究の傑作といわれるヴァン・オンセレンの Kas Maine の伝記に描かれている。ヨーロッパ人の農場で働くアフリカ人の辿る道は、国家の支援によって白人の資本主義農業が発展していく過程で、分益農民 (sharecropper) ないし借地農民 (cash tenants, labour tenants) から出来高払いの労働者 (labourer paid in kind) になり、やがてプロレタリアになるというものであった<sup>20)</sup>。

アフリカ人の居留地 (指定地、リザーブ) は、比較的繁栄した農業地域から人口過剰な労働供給源へと零落していった。この歴史については、1880年代から1970年代まで、各時代と各地域で異なる経験を経済史の立場からさらに明らかにしていくことが必要であろう。たとえばベイナーの研究に示されているように、少数のアフリカ人の小土地保有農民は生延びたようである。また、アフリカ人農民の中には都市に出ていくものもいたが、かえってそのために労働不足が生じ、農民のプロレタリア化は、部分的にしか進行しなかった面がある。というのは、資力の乏しい白人農民は、賃金労働よりも labour tenancy によって労働力を確保する必要に迫られる場合があったからである<sup>21)</sup>。

ところで、農村の家族の歴史でも、同じような剝奪のプロセスがくり返されたと考えられる。しかし、南アフリカ経済史では、この分野の研究は軽視されてきた。1970年代、多くの人類学者は、貧困化と労働移動で形容される農村社会の有効な分析単位は核家族ではなく、所得を共有する集団として定義される家計 (そのメンバーは所得機会に応じて変動する) であると主張するようになった。出稼ぎ労働者は、現金を持ち帰り「homestead をつくった」が、夫のいない間しばしば子供の世話をする妻のために祖父母がその経営を助けた。その結果、家族内のつながりは、女性中心となるが多かった。これは、工業化にともなって生じる広範な社会変化のなかで、男性間の関係によって形成されていた血族システムが、ますます女性間の関係に基づくようになったことを表している。1990年代になると、社会の分解が著しく、人類学者は家計さえも分析単位とすることを放棄した。スピーゲルが解くように、貧困な人々が生存をかけて避難場所を頻繁に時を移さず出入りする場合、「家庭内の流動性」(domestic fluidity)が高まり、家庭が「制度的な一貫性を欠く」(institutional incoherence) ことになったのである<sup>22)</sup>。

### 3 鉱業と製造業

鉱業史研究は、1970年代と比較すれば、南アフリカ経済史研究の中心を占める分野ではなくなつたが、現在でもなお詳細な研究が行われている。アーカイブへのアクセスが困難であったにもかかわらず、チュレルとウォーガーによる2つのキンバリーの初期ダイヤモンド鉱業史研究が現れた。

それによると、ダイヤモンド鉱山の地質学的特質が企業の独占を促進し、そうした動きから排除されるのを免れようとした弱小採掘人は独占に反対する一方で人種差別を生み、この人種差別のためにアフリカ黒人労働者はコンパウンド・システムという権威主義的支配の下に従属させられたのである。キンバリーは、南アフリカにおいて工業化に先立つ時期の人種秩序から20世紀の残酷で際立った差別構造をもつ人種秩序へ移行する舞台となった。この2つの研究では、キンバリー鉱山の支配権がデビアスに委ねられていく手のこんだ交渉過程が明らかにされている<sup>23)</sup>。また、ニューベリーの著書は、1世紀にわたって世界のダイヤモンド市場においてデビアスが支配を維持した生産者と商人の複雑な関係を明らかにした労作である<sup>24)</sup>。

1980年代中頃以降、金鉱業史についてはあまり書かれていない。それは、多くの資料が公開されていないからである。19世紀最後の四半期において帝国の介入を促したこの産業の役割に関して興味深い議論が現れた。たとえば、コープやカツツの最近の研究では、1876年のカーナボン卿による連邦化計画についての戦略的要因による説明とジェームソン侵略事件を説明するために深層鉱山と露出鉱山とを区別する考え方の両方が批判されている。ラッセル・アリの著書では、イングランド銀行やイギリス政府の記録を研究しても、金の供給を保護しようという関心が1899年のイギリスの攻撃（アングロ・ボーア戦争）を動機づけたという証拠は見あたらない<sup>25)</sup>。

クルーガーの政府は鉱業を支援し、白人鉱夫たちの同感をえていたといわれる。しかし、鉱夫に焦点をあわせた研究はこれまで少なかった。カツツやパッカーのような「ラディカル派」の歴史家は、鉱夫の貧困やぞっとするような労働条件を明らかにし、珪粉症（珪肺病）が彼等の命を奪うまで平均でわずか7年間しか労働寿命のないことを暴露した。鉱山主がこの病気の存在を隠したやり方は、アフリカ人労働者に蔓延した結核の責任を逃れようとしたやり口と同じである。聞き取り調査に基づく最近の研究によれば、アフリカ人労働者は3,600mの地下で金を掘り、作業場の温度は92°Fであったといわれる<sup>26)</sup>。

アフリカ人の鉱山への労働移動について1970年代にえられた理解は、クラッシュ、ジープズ、ユーデルマンの共著に見られるように、現在でも一般的には認められている。具体的には、移動理由は多様であり、その理由も時間的に変化した点、また農場の購入には鉱山賃金が利用されたことなどがあげられている<sup>27)</sup>。最近の研究では、鉱山のコンパウンドでの出稼ぎ労働者の生活文化（農村の家族生活へのコミットとプロレタリア化への抵抗）について多くのことが明らかにされた。労働者の間では、経営パターンリズムが容認され、コンパウンドでは民族的なつながりに基づく人間関係が形成された。また、年長者と若者の間では「鉱山での結婚」が制度化された。それは、出稼ぎ労働者として彼等に否定されていた出身農村の農場での男性としての役割を最大化しようとしたことと結びついていたのである。ナタールの農場についても同様の説明が行われている。アトキンズの研究によれば、労働者たちは独特の時間感覚をもった「アフリカ人の労働倫理」を示し、パターンリスティックな関係を選好し、労働者の連帯を促進して、雇主に対して圧力をかける方法を身につけていた。しかし、これらの研究は、出稼ぎ人の出身農村を「固定化し、静態的に」示していると

の批判がある。多くの出稼ぎ人は、植民地支配とミッション教育との遭遇で変容した社会の出身であったからである<sup>28)</sup>。

石炭業に関しては、ナタールをあとづけたゲストの研究をあげることができる。1886年以降、ナタールとトランスバールで成長したこの産業は、金鉱への燃料供給という重要な役割を演じた。低賃金労働によって産出された安価な石炭(1970年代でも世界でもっとも安かった)は、南アフリカの工業化に必要とされた安価な電力を供給するのに一役かったからである<sup>29)</sup>。

さて、製造工業に関しては、第一次世界大戦以前の時期については概ね2つの方向が見られた。すなわち、食品加工業と消費財産業の発展、それに鉱山にセメント、化学製品、機械修理部品および電気を供給する重工業である。これと同様に重要でありながら研究が遅れている鉄道建設の歴史は、ヘイデンリクの著作以外に見出すことができない。鉄道は、1870年代にはケープの農業地帯へ、1885年にキンバリーへ、1890年代にウィットウォーターズランドへ、その後、第一次世界大戦前後には支線網の拡大へ、と発展していった。このプロセスをあとづける経済史研究が必要である。南アフリカの鉄道は、もっぱら輸入資材によって建設されたとはいえ、石炭の市場を提供し、電気と鋼鉄の需要を創出し、地域経済を統合してランドに重工業を集中させる重要な役割を演じた<sup>30)</sup>。

最近の南アフリカ経済史研究は、1914年以後の20年間に集中している。クリスティやクラークの著作から知られるように、第一次世界大戦後のスマッツ政府は、工業化計画の下で、準国営の電力供給会社(ESCOM)を設立した。この会社は、国民経済の中核となり、アフリカの電力の60%以上を生み出した<sup>31)</sup>。「ラディカル派」の歴史家は、1924年の国民党と労働党による連立政府の政策に注目し、鉱業から製造業へ南アフリカ経済を飛躍させるうえで帝国の資本と対決する民族(国家)資本の主張として保護関税政策をとらえている。その後の研究によれば、衣類産業のように特定の産業は保護政策によって恩恵を受けたが、関税は一般に低く、それらは農業の保護を目的としたものであり、製鋼や機器製造などの基軸部門に適用されることは少なかった。国民党政府は、その政治的責任において産業成長の基盤として準国営の鉄鋼公社(ISCOR)を設立する。クロスが行ったアーカイブでの最近の資料研究によれば、ESCOMもISCORもともに民間資本と協力したことが示されている。ESCOMは既存の民間の供給業者に電力を売り、ISCORは、消費者の犠牲のもとでヨーロッパ鉄鋼カルテルと南アフリカ市場を分割したのである<sup>32)</sup>。

1920年代には民間の産業も進展した。バーガーやダンカンが明らかにしたところによれば、とくに、衣類産業では、多くの女性が雇用され、自動車組立(海外の製造業者の子会社)も新たな企業者活動の源泉となった。しかし、自動車運送と耐久消費財としての電化製品の南アフリカ経済に対するインパクトの研究は十分であるとは言えない。この両産業は、1933年の金本位離脱後の南アフリカに経済成長をもたらした。この成長は、ほとんど南アフリカ経済の構造変化を起こさず、機器産業は下請け産業にとどまったとの指摘もあるが、戦時の機器産業および金属産業の拡大は、南アフリカの工業化を新たな段階に前進させたことは確かであろう<sup>33)</sup>。

1948年以降、国民党の産業政策は、政治的および軍事的事情に著しく影響された。残念ながら、



アフリカーンス語で書かれた資料に基づく経済史研究はほとんど進んでいない。治安維持という要因は、1950年代には明らかに資本の高度化した準国営企業—SASOL—の発展、それに加えて、1970年代には白人農場をカバーする全国の配電網の拡大を規定した。1950年代には鉄道が、1961年以降には ISCOR がアフリカーナ支配の下におかれた。繊維産業も、政治的な事情のために低賃金で労働集約的な部門としてバンツースタンに隣接して建設された。カプランは、Defence Resource Board の南アフリカ経済への影響を明らかにしている<sup>34)</sup>。1950年代初めに20の部門別委員会が設立され、戦略物資の生産が検討された。しかし、この分野の究明は今後の研究を待つ他はない。また、1964年の自動車組立への「ローカル・コンテンツ」導入のような製造業拡大戦略の研究も同様である。政治的に動機づけられたイニシャティブが産業の発展を歪める場合があることが、クロンプトンやブラックの研究では指摘されている。たとえば、石油化学産業は、もっぱら川上産業への供給の担い手である SASOL の利益に奉仕し、川下への供給の担い手であるプラスチック産業には役立たなかった。民間部門でも同様に、経済環境はパルプ・製紙プラントのような巨大企業が優遇されたのである。一方、スマツツ他の研究が明らかにしているように、アフリカ人のフォーマルな企業家活動とインフォーマルな活動は1970年代末まで意図的に抑圧されたが、インフォーマルな事業はタウンシップの経済を支えてきた<sup>35)</sup>。

#### 4 19世紀植民地経済史

南アフリカ経済史の研究において、一つの重要な領域を形成しているのは19世紀の植民地経済史研究である。旧世代の歴史家にとって、19世紀の南アフリカ経済史は、アフリカーナのトレッカーや鉱物の発見を中心としたものであったが、近年の研究では、むしろイギリス帝国ないし資本主義との関連を強調するものが増えている。イギリスは、1806年にケープ植民地を支配するようになり、この植民地はイギリス帝国経済のダイナミズムの中に統合された。イギリス商人は、時を移さずケープタウンの商業を自らの掌中におさめ、その街の姿を変えてしまった。1820年代に東ケープに入ったイギリス人入植者は、アフリカ人との交易に目を向けはじめた。1830年代には、彼等はメリノ種の羊を飼い始め、東ケープは植民地経済の成長の中心地が変わっていった。移民たちの本拠地にあたるグラハムズタウンは、アフリカ人の土地と家畜の略奪の基地となり、あまり乗り気でないイギリス帝国政府を征服戦争に引き込んだのである。こうした歴史は、ベック、ブーチ、ウイキンズの研究の語るところである<sup>36)</sup>。

1820年代末にワイン生産用のぶどう栽培が崩壊した後、西ケープの農業は安定を欠くものとなった。西ケープの農民とその農業は、重い債務、土地の転売、不安定な労働力供給の下に置かれていた。それに、景気循環が追い討ちをかけた。こうした状況は、マリニコウイツとドゥーリングの研究、それにスタンダード・バンクの資料集の中で明らかにされている<sup>37)</sup>。19世紀中頃以降、「自由な金融」(a free trade in money) が高金利を抑制する制度にかわったのは、農業信用(金融)の

供給源が血族や地方の名士から銀行や商社にかわったからである。商人やヨーロッパ人の移民は、しばしば農業革新の担い手となった。一方、南アフリカ共和国(トランスバール)では、「グレート・トレック」の時代まで遡る土地の記録が移民史を明らかにするために利用され始めた。ベルグの研究によると、地方の名士が土地を蓄積できたのは、公職あるいは非農場活動で資金を貯えることができたからであった<sup>38)</sup>。

「ラディカル派」の研究では、次のように論じられることが多い。白人移民の経済と緊密な接触をもっていたアフリカ人小土地保有農民(たとえば東ケープのムフェング、ナタールの改宗農民、オレンジ自由国の分益農民)は、市場が開放されていた間は企業心を発揮できた農民であったが、植民地政府の支援をうけたヨーロッパ人農民の競争によって後には粉碎された。エルドレッジやランバートの研究は、レソトやナタールの事例を通してこの点を明らかにしたものである。また、ナタール植民地に渡ったインド系移民も、1920年代に阻止されるまでは小土地保有の拡大期を経験した。ただし、フロインド、バーナ、パダヤチーの研究によれば、インド系移民の場合は、商業、教育、産業での雇用を通じて植民地社会での自らの進路を見出したものが多かったようである<sup>39)</sup>。

オランダの支配下でケープ植民地の小麦生産は1770年代まで着実に増加した。1740年以後ワインの生産が拡大し、1787年にはピークに達している。その後、東ケープでは牧畜業が繁栄した。こうした歴史は、ヴァン・デュインやロスの著書で論じられているところである<sup>40)</sup>。最近では、ケープタウンとハーグに残されている資料を利用して詳細な研究が行われるようになった。その資料のなかには、1677-1731年の土地台帳、土地財産の移転リスト、1729年の各入植者の職業状況調査、1731年の人頭税簿(opgaaf roll, hoofbelasting)、個人資産(家畜)や生産のセンサスなどがある。こうした資料から当時奴隷制社会であったケープ植民地の状況がわかる。ウォーデンの研究によれば、ケープ奴隷制社会は高度に商業化されており、新世界に匹敵するほどであったが、奴隷は少人数保有の形で広く分散していた。このような奴隷の存在の仕方と労働力の構成が男性優位であったことがあいまって、そのユニークで多様な出自(インド、インドネシア、モザンビーク、インド洋諸島)を反映した特有の奴隷文化と奴隷管理方法が生み出されたようである。これに対して、シェルは、奴隷間にはヒエラルキーが見られ、奴隷主家族がパターナリスティックな奴隷管理を行い、女性奴隷が家事労働に限定されたことを強調した<sup>41)</sup>。しかし、両者の議論は必ずしも対立するものではない。奴隷労働は、今では、多様な労働力の一部であったことが知られるようになった。バンク、フィリューン、ホストの研究によれば、ケープタウン、スウェレンダム、クラバー・バレーでは、そうしたことを示す資料が発見されている<sup>42)</sup>。

また、1823年と1838年の奴隷解放の間に行われたイギリスによる奴隷制の改善にも焦点をあてたウォーデンとクレイスの研究が現れた。というのは、この時期の請願書は、犯罪記録よりもっと直接に奴隷の声を示していたからである。ロス、レイヤー、ウイルソン、ラドローなどの最近の研究では、奴隷解放は突出した事件として扱われなくなった。奴隷制はすでに衰退していたからであろう。とは言え、土地、資本および水源へのアクセスが故意に拒絶される場合があったために、フ

ロンティア地区のかつての奴隷のうちで少数のものだけが独立農民になれたにすぎない。多くのものは、収穫期の臨時的な雇用と収入に依存することになった<sup>43)</sup>。1840年以後、農場生産が回復すると、かつての奴隷の中には農業労働者にとどまるものも出てきた。そして彼等には新たな法律を後ろだてとした抑圧が課せられたのである。しかし、マリンコウィッツ、ドゥーリング、スカリーの研究では、奴隷社会には強い抵抗が見られ、解放された奴隷たちは自由、移動性、交渉力、家族生活、個人の尊厳を享受できたと論じられている<sup>44)</sup>。

## むすび

クリストファー・ソーンダースによると、1923年には、ケープタウン大学の経済学部で経済史研究のポストが用意されていたとのことである。このような制度的な支援は、経済史として定義できる多くの著作を生んだ。南アフリカ経済史の古典とされる。ド・キービート（C. W. de Kiewiet）の著作—*A History of South Africa, Social and Economic*—もその成果の一つであろう。もっとも影響力のあったリベラル派の歴史家マクミランの初期の著作でも経済問題に力点がおかれていた<sup>45)</sup>。

しばしば指摘されるように、経済史は、歴史学と経済学が緊密に結びついた時代に学問研究の一領域として現れた。経済史は、明らかに経済的であるとされる多様な現象—経済分野における国家政策の歴史、特定の産業や商業の歴史、労働政策や労働組織の歴史、国家および地域の統計に観察される歴史的な変化—を追求してきた。この学問の最大の強みは、初期に影響をもった南アフリカの歴史家や社会学者が、経済現象の歴史的研究の成果を利用して南アフリカの社会と政治に進行していた構造形成に関して広範な説明を行なったことにあった。これこそ、経済史が潜在的に他の分野よりも存在意義を主張でき、他の分野の研究に影響を及ぼすことのできた理由であったと考えられる。

興味深いことに、これらすべての古典的な研究は、連立ないし連合政府の時代に属した。ところが、アパルトヘイトの時代になると、学問的には狭く定義される経済史ともっと政治的な趣きを持った経済史研究への分裂が顕著になる傾向がみられた。前者は、長い間、学問的に構成された経済史学科（学部）にひきうけられ、後者は、反アパルトヘイト運動の社会的および歴史的著作の表題の下に生きることになったのである。第二次世界大戦後、ホートン（D. H. Houghton）は、この2つの潮流を『オックスフォード版南アフリカ史』のなかで融合させようとしたが、成功したとは言えない。

1960年代末、若い新しい世代の「ラディカル派」の出現は、南アフリカにおける経済史研究にとって小さくない意義があった。「ラディカル派」の主張の根拠は、南アフリカにおける資本主義とアパルトヘイトの関係の再検討にある。「ラディカル派」は、もし南アフリカの資本家の必要とするものを細密に検討すれば、それは南アフリカの経済発展を根底で支える安価で不自由な労働の存在と

それをめぐる現実的な諸関係である、と論じた。「ラディカル派」と「リベラル派」の論争を通じて、南アフリカ経済史研究の未開拓の領域の検討に道が開かれていったのである。

さらに、「ラディカル派」は、南アフリカの社会構造の研究に「階級」という概念を持ち込んだ。「階級」概念の使用は、抵抗と組織の研究を促進し、しばしば反アパルトヘイト闘争を急進化させ、その運動に民族的よりもむしろ社会的性格を与える意図と結びついていたのである。「ラディカル派」の研究者たちは、一般的には歴史家というよりも社会学者であった。彼等は、アパルトヘイトと資本主義の関係の問題からさらに南アフリカ国家の性格を問う方向に前進した。こうした動向に加わった南アフリカの社会史家たちは、イギリスの「ラディカル派」の歴史家による「ヒストリー・ワークショップ」の運動に倣って、研究を広げていったのである。

他方、南アフリカ経済史に関しては、1981年と1983年にナトラスとコールマンによる二種類の教科書が出版された。以後、南アフリカ経済史の研究は活発になった面もあるが、断片的になってしまったとの批判もある。<sup>46)</sup>経済史研究のアプローチに関しては、リベラルで制度面を強調する立場をとっている「南アフリカ経済史学会」(Economic History Society of South Africa)に属する研究者たちは、1986年に『南アフリカ経済史ジャーナル』(*South African Journal of Economic History*)の第1号を出版した。この機関誌に論稿を寄せている研究者は、一般的に南アフリカの社会秩序の原因を前資本主義的遺制に帰し、それらが産業資本主義の成長を阻害したと考え、経済史が近代的経済成長と同義であると想定している<sup>47)</sup>。これと対照的に、「ラディカル派」の研究は、『南部アフリカ研究ジャーナル』(*Journal of Southern African Studies*)に数多くみられるが、そこでは、南アフリカの人種秩序は資本主義的工業化の所産であると考えられてきた。「南アフリカが歩んできた工業化の特有の道は、主として選挙権をもたない、低賃金の不熟練黒人労働の豊富な供給に帰せられる」と論じられる。しかし、「ラディカル派」の歴史家たちは、南アフリカ史の制度史的側面を軽視する傾きがあるとの批判が聞かれる。

以上のような、異なるアプローチの基礎をなしてきたアパルトヘイト時代の政治的・文化的対立は、今日でもなくなったわけではないが、最近の研究は、南アフリカの過去の複雑さにもっと敏感になったように思われる。アーカイブも次第に開放されるようになり、詳細な資料調査に基づく実証的研究が理論的論争を凌駕するようになったからであろう<sup>48)</sup>。最近10年間の研究を見ていると、農村の調査も他と比べて決して弱い研究領域ではなくなった。とは言え、南アフリカ経済史研究にはいくつかの課題がある。たとえば、南アフリカの社会や経済の研究において「ジェンダー」や「メンタリティ」ももはや無視されることはなくなったが、人口と家族の歴史的研究はまだ乏しい<sup>49)</sup>。また、輸送をはじめとするインフラストラクチャーや一般の人々の消費生活にかかわる財の消費と流通に関する研究は、もっと行われるべきであろう。さらに、1910年の連邦形成に先立つ時代の包括的な統計の整理もまだ不十分なままであり、その後の時代の統計はしばしば問題点を含んでいる<sup>50)</sup>。「リベラル派」と「ラディカル派」の一致点は、南アフリカが急速な工業化に成功をおさめたことである。そして、南アフリカの工業化は、いまや、漸進的で、複雑で、不完全で、その犠牲におい

てトラウマがあると考えられている。歴史の断片が統合されるにつれて、「電気と鉄鋼をベースにした産業革命が、プロレタリア化に対して例外的に弾力性をもつ農村社会において生じた」という問題の解明に経済史学の努力が傾けられつつあるように思われる。

本研究は、関西大学学術研究助成基金（平成8、9年度共同研究）による成果の一部である。

#### 注

- 1) 戦後の南アフリカ経済史の概観および1990年以降の南アフリカの政治経済の変化については、北川勝彦「南アフリカ帰路にたつ新生国家」（浅羽良昌・瀧澤秀樹編著『世界経済の興亡200年』東洋経済新報社 1999年、213～234ページ）および北川勝彦「新世紀南アフリカの目標」（飯田経夫・柏岡富英編『市場制度の動態』国際日本文化研究センター 1998年、73～101ページ）を参照。なお、南アフリカの民主化過程を簡潔に回顧したものとして、T. R. H. Davenport, *The Birth of A New South Africa*, Toronto, 1998. を参照。
- 2) I. Smith, “The revolution in South African historiography”, *History Today*, 38, February 1988, pp. 8-10. 南アフリカ史の研究を展望した文献としては、K. Smith, *The changing past: trends in South African historical writing*, Johannesburg, 1988. C. Saunders, *The making of the South African past: major historians on race and class*, Cape Town, 1988. を参照。また、近年の南アフリカ史をめぐる論争史については、峯 陽一「『南アフリカの歴史』を読むーリベラル・ラディカル論争をこえて」（L. トンプソン著、峯 陽一・吉國恒雄・宮本正興訳『南アフリカの歴史』明石書店、1995年、419～456ページ）および峯 陽一「南アフリカ史と都市化」（日本アフリカ学会『アフリカ研究』第52号 1998年、77～86ページ）を参照。なお、本研究においては、以下の諸論稿を参考にした。G. Minkley, “Re-examining Experience: the New South African Historiography”, *History in Africa*, 13, 1986, pp. 269-281. R. Greenstein, “The Study of South African Society: Towards A New Agenda for Comparative Historical Inquiry”, *Journal of Southern African Studies*, 20-4, December, 1994, pp. 641-661. J. Inggs, “The first decade”, *The South African Journal of Economic History*, 11-1, March 1996, pp. 1-57. W. M. Freund, “Economic History in South Africa: An Introductory Overview”, *South African Historical Journal*, 34, May 1996, pp. 127-150. J. W. N. Teempelhoff, “Writing Histories and Creating Myths: Perspectives on Trends in the Discipline of History and Its Representations in Some South African Historical Journals 1985-1995”, *Societiae Militaria*, 27, 1997, pp. 121-147. J. Iliffe, “The South African economy, 1652-1997”, *Economic History Review*, LII- 1, 1999, pp. 87-103.
- 3) わが国における南アフリカ経済史研究の展望については、以下の文献を参照。「日本におけるアフリカ研究の回顧と展望：経済学・経済史学」（日本アフリカ学会『アフリカ研究』第25号 1984年、152～164ページ）。K. Hayashi, *African Historical Studies in Japan*, IDE Working Paper Series 2, Institute of Developing Economies July 1992. K. Hayashi, *Japanese Studies on Southern Africa*, IDE Working Paper Series 3, Institute of Developing Economies July 1993. また、1990年以降の南アフリカの政治経済を対象としたわが国の研究としては、以下のものを参照。川端正久・佐々木建編『南部アフリカ：ポスト・アパルトヘイトと日本』頸草書房 1994年、川端正久・佐藤 誠編『新生南アフリカと日本』頸草書房 1994年、川端正久・佐藤 誠編『南アフリカと民主化：マンデラ政権とアフリカ新時代』頸草書房 1996年、林 晃史編『南アフリカ：民主化の行方』アジア経済研究所 1994年、林 晃史編『南部アフリカ民主化後の課題』アジア経済研究所 1997年、林 晃史『南部アフリカ政治経済論』アジア経済研究所 1999年。最近のわが国における研究は、南アフリカにおける各分野の実態調査に基づくものが増え、しかも多様な観点から行われるようになった。以下の研究は、そうした動向の一端を示している。西浦昭雄「南アフリカ『企業社会』の現状と民主化の影響」（平野克己編『南アフリカの衝撃ーポスト・マンデラ期の政治経済ー』アジア経済研究所、1998年、55～74ページ）、西浦昭雄「南アフリカにおける企業社会の趨勢とアフリカ・ルネサンス」（平野克己編『新生国家南アフリカの衝撃』アジア経済研究所 1999年、201～229ページ）、西浦昭雄「工業開発戦略」（佐藤 誠編著『南アフリカの政治経済学：ポスト・マンデラとグローバリゼーション』明石書

- 店 1998年、107～133ページ)、佐藤千鶴子「土地改革と農業開発」(佐藤 誠編著『南アフリカの政治経済学：ポスト・マンデラとグローバリゼーション』明石書店 1998年、135～162ページ)、平野克己「南アフリカにおける大量失業問題の産業構造論的分析」(平野克己編『新生国家南アフリカの衝撃』アジア経済研究所 1999年、231～262ページ)、峯 陽一「紛争処理における多極共存型統治モデルの可能性—南アフリカ共和国の事例から—」(峯 陽一・畑中幸子編著『憎悪から和解へ：地域紛争を考える』京都大学学術出版会 2000年、105～155ページ) 南アフリカの人々の歴史意識を検討した論稿としては、永原陽子「歴史としてのアパルトヘイト—『真実和解委員会』と南アフリカにおける歴史意識—」(歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』シリーズ歴史学の現在4、青木書店、2000年、239～266ページ)
- 4) C. Muller, *Five hundreds years: a history of South Africa*, Pretoria, 1975. 伝統的には、南アフリカ史の研究は、4学派に分けられてきたようである。(1) “settler school” (George McCall Theal, George Cory, Frank Cana), (2) “liberal school” (W. M. Macmillan, E. A. Walker, C. W. de Kiewiet, T. R. H. Davenport), (3) “Afrikaans school” (A. J. H. Van der Walt, P. J. van der Merwe, G. D. Scholtz, C. F. J. Muller, A. N. Pelzer, F. A. van Jaarsveld), (4) “radical school” (P. Delius, S. Trapido, S. Marks, C. van Onselen, B. Bozzoli, W. Beinart) J. W. N. Teempelhoff, “Writing Histories and Creating Myths: Perspectives on Trends in the Discipline of History and Its Representations in Some South African Historical Journals 1985-1995”, *Societiae Militaria*, 27, 1997, pp. 126-127.
- 5) M. Wilson & L. Thompson eds., *Oxford History of South Africa*, 2Vols, Oxford, 1971.
- 6) 1960年代におけるアフリカ史研究の変貌については、T.O. Ranger, *The Emerging Themes of African History*, Nairobi, 1968. を参照。最近のアフリカ経済史研究の展望としては、P. T. Zeleza, *A Modern Economic History of Africa, Vol. 1: The Nineteenth Century*, Dakar, 1993, pp. 1-22. を参照。なお、以下の優れた研究史展望がある。A. G. Hopkins, “African Economic History: the First Twenty-Five Years”, *Journal of African History*, 30-1, 1989, pp. 157-163. J. Iliffe, “The Origins of African Population Growth”, *Journal of African History*, 30-1, 1989, pp. 165-169. A. G. Hopkins, “Big Business in African Studies”, *Journal of African History*, 28-1, 1987, pp. 119-140. P. Manning, “The Prospects for African Economic History: Is Today Included in the Long Run?”, *African Studies Review*, 32, 1989, pp. 49-62.
- 7) この立場の研究者の諸論稿は、以下の三部作に収められている。S. Marks & A. Atmore eds., *Economy and Society in Pre-industrial South Africa*, London, 1980. S. Marks & R. Rathbone eds., *Industrialization and Social Change in South Africa: African class formation, culture and consciousness, 1870-1930*, London, 1982. S. Marks & S. Trapido eds., *The Politics of Race, Class and Nationalism in twentieth century South Africa*, London, 1987.
- 8) たとえば、N. Worden, *The Making of Modern South Africa: Conquest, Segregation and Apartheid*, Oxford, 1994, pp. 5-33, 50-64. の記述を参照。最近、ウォーデンの著書以外に次のような南アフリカ史の通史が公刊された。R. Ross, *A Concise History of South Africa*, Cambridge, 1999. J. Barber, *South Africa in the Twentieth Century*, Oxford, 1999. また、ダベンポートの古典的な著書、T. R. H. Davenport & C. Saunders, *South Africa: A Modern History*, 5th ed., London, 2000. の第5版がソーンダースとの共著で刊行されている。
- 9) A. Black & J. Stanwix, “Manufacturing Development and the Economic Crisis: restructuring in the eighties”, *Social Dynamics*, 13-1, 1987, pp. 47-59. また、S. Gelb ed., *South Africa's Economic Crisis*, Cape Town, 1991. および O. Crankshaw, *Race, Class and the Changing Division of Labour under Apartheid*, 1997. を参照。なお、現代南アフリカ経済論争については、『南部アフリカ研究ジャーナル』に掲載された以下の論文がある。N. Nattrass, “Economic Restructuring in South Africa: the Debate Continues”, *Journal of Southern African Studies*, 20-4, 1994, pp. 517-531. R. Kaplinsky, “Economic Restructuring in South Africa: the Debate Continues: A Response”, *Journal of Southern African Studies*, 20-4, 1994, pp. 533-537. J. Sender, “Economic Restructuring in South Africa: Reactionary Rhetoric Prevails”, *Journal of Southern African Studies*, 20-4, 1994, pp. 539-543. N. Nattrass, “Controversies about Capitalism and Apartheid in South Africa: an Economic Perspective”,

*Journal of Southern African Studies*, 17-4, 1991, pp. 654-677.

- 10) B. Fine & Z. Rustonjee, *The Political Economy of South Africa: from Mineral-Energy Complex to Industrialization*, Johannesburg, 1996.
- 11) モルの以下の論稿を参照。T. Moll, "Did the Apartheid economy 'fail'?", *Journal of Southern African Studies*, 17, 1991, pp. 271-291. T. Moll, "Growth through redistribution: a dangerous fantasy?", *South African Journal of Economics*, 59, 1991, pp. 313-330. なお、同様の立場をとる以下の論文も参照。J. vdS. Heyns, "Aspects of Fiscal Policy in South Africa, 1985-1995", *South African Journal of Economic History*, 10-2, 1995, pp. 51-79. N. Natrass, "Gambling on Investment: competing economic strategies in South Africa", *Transformation*, 31, 1996, pp. 25-42. 戦後南アフリカの工業化と経済成長を展望したものとしては、S. Jones, "Real growth in the South African economy since 1961 Part II: the tertiary sector", *South African Journal of Economic History*, 6-1, 1991, pp. 34-60. および S. Jones, "Real growth in the South African economy since 1961", *South African Journal of Economic History*, 5-2, 1990, pp. 40-60. を参照。
- 12) S. Jones ed., *Financial Enterprise in South Africa since 1950*, Basingstoke, 1992, p. 19. 主としてスタンダード・バンクの資料に依拠して書かれた S. Jones, *The Great Imperial Banks in South Africa: a study of the business of Standard Bank and Barclays Bank, 1861-1961*, Pretoria, 1996. と A. Webb, *The Roots of the Tree: a study in early South African banking: the predecessors of First National Bank, 1828-1926*, 1992. は、最近のすぐれた南アフリカ銀行史研究である。
- 13) G. Verhoef, "Afrikaner Nationalism in South African banking: the case of Volkskas and Trust Bank" および "Nedbank, 1945-89: the continental approach to banking in South Africa", in S. Jones ed., *Financial Enterprise in South Africa since 1950*, Basingstoke, 1992. を参照。
- 14) D. Innes, *Anglo American and the rise of modern South Africa*, Johannesburg, 1984. オッペンハイマー家の歴史については、D. Pallister, S. Stewart & I. Lepper, *South Africa Inc.: The Oppenheimer Empire*, London, 1987. を参照。なお、南アフリカ経済における企業融合の経済的諸結果については、ルイスの研究がある。D. Lewis, "The character and consequences of conglomeration in the South African economy", *Transformation*, 16, 1991, pp. 29-48.
- 15) T. Cross, "Afrikaner nationalism, Anglo American and Iscor: the formation of the Highveld Steel and Vanadium Corporation, 1960-70", *Business History*, 36-3, 1994, pp. 81-99. R. Crompton, *An industrial strategy for the commodity plastics sector*, Cape Town, 1995. F.C.vN. Fourie & A. Smith, "The South African cement cartel: an economic evaluation", *South African Journal of Economics*, 62, 1994, pp. 123-143. また、S. Jones ed., *Financial Enterprise in South Africa since 1950*, Basingstoke, 1992, pp. 16-24. を参照。
- 16) 外国投資の動向と南アフリカ経済の変化については、以下の研究を参照。P. Draper, "Disinvestment and the restructuring of the South African computer-hardware industry", *South African Journal of Economic History*, 10-1, 1995, pp. 51-73. D. Duncan, "Foreign and local investment in the South African motor industry 1824-1992", *South African Journal of Economic History*, 7-2, 1992, pp. 53-81.
- 17) G. Verhoef, "The dynamics of South African banking in the 1980s", *South African Journal of Economic History*, 9-1, 1994, pp. 84-109. 前掲、D. Lewis, "The character and consequences of conglomeration in the South African economy", *Transformation*, 16, 1991, pp. 29-48. も参照。
- 18) A. Minaar, "The effects of the great depression (1929-1934) on South African white agriculture", *South African Journal of Economic History*, 5-2, 1990, pp. 83-108. また、両大戦間期における羊毛、メイズ、産業保護政策と雇用創出の問題を検討したミナール、ランビー、アーチャーの研究は興味深い。A. Minaar, "The Great Depression 1929-1934: adverse exchange rates and the South African wool farmer", *South African Journal of Economic History*, 5-1, 1990, pp. 31-48. A. Minaar, "The South African maize industry's response to the Great Depression and the beginning of large-scale state intervention 1929-1934", *South African Journal of Economic History*, 4-1, 1989, pp. 68-78. A. Lumby, "Foreign trade and economic growth: South Africa during the inter

- war years”, *South African Journal of Economic History*, 5-2, 1990, pp. 61-82. A. Lumby, “A comment on the real forces in South Africa’s industrial growth prior to 1939”, *South African Journal of Economic History*, 5-1, 1990. S. Archer, “Industrial protection and employment creation in South Africa during the inter-war years”, *South African Journal of Economic History*, 4-2, 1989, pp. 4-24. また、ナタールの砂糖業については、リンカーンの研究を参照。M. D. Lincoln, “The culture of the South African sugarmill: the impress of the sugarocracy”, Ph.D. Thesis, University of Cape Town, 1985. なお、リンカーンには、別稿、D. Lincoln, “Files in the Sugar Bowl: the Natal Sugar Industry Employer’s Union in its heyday, 1940-1954”, *South African Historical Journal*, 29, 1993, pp. 177-208. がある。
- 19) W. Beinart, “Soil erosion, animals and pasture over the longer term: environmental destruction in southern Africa”, in M. Leach & R. Mearns, *The lie of the land*, 1996, ch.3. なお、W. Beinart & P. Coates, *Environment and History: The taming of nature in the USA and South Africa*, London, 1995. もあわせて参照。
- 20) C. van Onselen, *The Seed is Mine: the life of Kas Maine, a South African sharecropper, 1894-1985*, New York, 1996. 本書の書評としては、たとえば K. Breckenridge, “Orality, Literacy and Archire in the Making of Kas Mine”, *Journal of Natal and Zulu History*, 17, 1997 pp.120-136. また ‘Money with Dignity’: Migrants, Minelords and the Cultural Politics of South African Gold Standard Crisis, 1920-33”, *Journal of African History*, 36-2, 1995, pp. 271-304. を参照。なお、W. Bundy & W. Beinart, *Hidden Struggles in rural South Africa*, London, 1987. もあわせて参照。
- 21) W. Beinart, “Transkei smallholders and agrarian reform”, *Journal of Contemporary African Studies*, 11-2, 1992, pp. 178-199. 農場労働政策の影響については、S. Schirmer, “Reactions to the state: the impact of farm labour policies in the mid-eastern Transvaal”, *South African Historical Journal*, 30, 1994, pp. 61-84. H. S. Simelane, “The colonial state, peasants and agricultural production in Swaziland, 1940-1950”, *South African Historical Journal*, 26, 1992, pp. 93-115. D. Duncan, “The state divided: farm labour policy in South Africa, 1924-1948”, *South African Historical Journal*, 24, 1991, pp. 67-89. J. Lambert, “The undermining of the homestead economy in colonial Natal”, *South African Historical Journal*, 23, 1990, pp. 54-73. R. Morrell, “African Land purchase and the 1913 Native Land Act in Eastern Transvaal”, *South African Historical Journal*, 21, 1989, pp. 1-18. を参照。南アフリカの出稼ぎ労働史については、A. R. Booth, “Homestead, State and Migrant Labour in Colonial Swaziland”, *African Economic History*, 14, 1985, pp. 107-145. A. Jeeves, *Migrant Labour in South Africa’s Mining Economy: the Struggle for the Gold Miners’ Labour Supply, 1890-1920*, Kingston, 1985. A. H. Jeeves, “Identity, Culture and Consciousness: industrial work and rural migration in Southern Africa, 1860-1987”, *South African Historical Journal*, 33, 1995, pp. 194-215. A. Jeeves, “Migrant labour and South African expansion, 1920-1950”, *South African Historical Journal*, 18, 1986, pp. 73-97. を参照。また、南アフリカの農業、牧畜、農民および農村社会の変化を研究したのものとしては、以下の論文を参照。E. A. Eldredge, “Drought, Famine and Disease in 19th century Lesotho”, *African Economic History*, 16, 1987, pp. 61-93. T. V. MacClendon, “Hiding Cattle on the White Man’s Farm: Cattle Loans and Commercial Farms in Natal, 1930-50”, *African Economic History*, 25, 1997, pp. 43-58. J. Lewis, “The Rise and Fall of the South African Peasantry: A Critique and Reassessment”, *Journal of Southern African Studies*, 11-1, 1984, pp. 1-24. M. J. Murray, “The Origins of Agrarian Capitalism in South Africa: a Critique of the ‘Social History’ Perspective”, *Journal of Southern African Studies*, 15-4, 1989, pp. 645-665.
- 22) A. Spiegel, “Introduction: domestic fluidity in South Africa”, *Social Dynamics*, 22-1, 1996, pp.5-6. 出稼ぎ労働者については、D. B. Coplan, *In the time of cannibals: the word music of South Africa’s Basotho migrants*, Johannesburg, 1984. および P. Delius, *A lion amongst the cattle: reconstruction and resistance in northern Transvaal*, Portsmouth, 1996. を参照。なお、F. Wilson & M. Ramphele, *Uprooting Poverty: the South African challenge*, Cape Town, 1989. も参照。
- 23) R. V. Turrell, *Capital and labour on the Kimberley diamond fields, 1871-1890*, Cambridge, 1987. W.



- Worger, *South Africa's city of diamond: mine workers and monopoly capitalism in Kimberley, 1867-1895*, New Haven, 1987.
- 24) C. Newbury, *The diamond ring: business, politics, and precious stones in South Africa, 1867-1947*, Oxford, 1989. C. Newbury, "South Africa and the international diamond trade", *South African Journal of Economic History*, 10-2, 1995, pp.1-22, 11-2, 1996, pp. 251-284.なお、ダイヤモンド鉱業の研究史を整理した文献としては、I. R. Phimister, "Historians and the Big Hole: Kimberley's historiography reviewed", *South African Historical Journal*, 20, 1988, pp. 105-113.を参照。
- 25) R. L. Cope, "Strategic and socio-economic explanations for Carnavon's South African confederation policy", *History in Africa*, 13, 1986, pp. 13-34. E. N. Katz, "Outcrop and deep level mining in South Africa before the Anglo-Boer War: reexamining the Blainey thesis", *Economic History Review*, XLVIII, 1995, pp. 465-489. R. Ally, *Gold and Empire: the Bank of England and South African gold producers, 1886-1926*, Johannesburg, 1994. ラッセル・アリには、以下の別稿がある。R. Ally, "The South African Pound Comes of Age: Stirling, the Bank of England and South Africa's Monetary Policy, 1914-25", *Journal of Imperial and Commonwealth History*, 22-1, 1994, pp. 109-126. R. Ally, "War and Gold: the Bank of England, the London Gold Market and South Africa's Gold, 1914-19", *Journal of Southern African Studies*, 17-2, 1991, pp. 221-238. なお、S. Marks & S. Trapido, "Lord Milner and the South African state reconsidered", in M. Twaddle ed., *Imperialism, the state and the Third World*, 1992, ch.4 も参照。わが国における南アフリカ金鉱業史研究については、以下の論文を参照。大西威人「南アフリカにおける投機的資本構造の形成」(1)、(2)、(3) 『青踏女子短期大学紀要』第13号 1990年、93~114ページ、第14号 1991年、53~72ページ、第16号 1993年、25~44ページ。佐伯 丈「南ア金鉱業における鉱業金融商会とグループ・システム」関東学院大学『経済系』第147集、1986年、1~28ページ、佐伯 丈「南アフリカにおける新金鉱地の発見と鉱業金融商会—1930年代~60年代—」(1)、(2)、(3)関東学院大学『経済系』第162集 1990年、44~66ページ、第164集 1990年、19~42ページ、第165集 1990年、55~85ページ、佐伯 丈「南ア新金鉱地の発見と鉱業金融商会」(1)、(2) 関東学院大学『経済系』第168集 1991年 28~46ページ、第169集 1991年、58~79ページ、佐伯 丈「南アフリカ金鉱山開発と鉱業金融商会—ラント金鉱発見から第二次世界大戦まで—」(山田秀雄編著『イギリス帝国経済の構造』新評論 1986年、225~296ページ)。金鉱業と鉄道については、G. Pirie, "Railways and Labour Migration to the Rand Mines: Constraints and Significance", *Journal of Southern African Studies*, 19-4, 1993, pp. 713-730.を参照。南アフリカ戦争の背景と原因については、A. Porter, "The South African War (1899-1902): Context and Motive Reconsidered", *Journal of African History*, 31-1, 1990, pp. 43-57.がある。また、ジェームソン侵略事件と南アフリカ戦争については、I. Phimister, "Unscrambling the scramble for Southern Africa: The Jameson Raid and the South African War revisited", *South African Historical Journal*, 28, 1993, pp. 203-220.を参照。
- 26) E. Katz, *The white death: silicosis on the Witwatersrand gold mines, 1886-1910*, Johannesburg, 1994. E. Katz, "The underground route to mining: Afrikaners and the Witwatersrand gold mining industry from 1902 to the 1907 miners strike", *Journal of African History*, 36, 1995, pp. 467-489. R. M. Packard, *White plague, black labour: tuberculosis and the political economy of health and disease in South Africa*, Pietermaritzburg, 1989. 両者の研究以外に、以下の文献を参照。M. P. Molapo, "Job stress, health and perceptions of migrant mineworkers", in J. Crush & W. James eds., *Crossing boundaries: mine migrancy in a democratic South Africa*, Cape Town, 1995, ch.9. J. Guy & M. Thabane, "Technology, ethnicity and ideology: Basotho miners and shaft-sinking on the South African gold mines", *Journal of Southern African Studies*, 14, 1987-8, pp. 257-278. M. Smith, "'Working in the grave': Mining accidents on the Witwatersrand Gold miners, 1900-1940", *South African Journal of Economic History*, 7-2, 1992, pp. 127-147.
- 27) J. Crush, A. Jeeves and D. Yudelman, *South Africa's labour empire: a history of black migrancy to gold mines*, Boulder, 1991.
- 28) A. H. Jeeves, "Identity, culture and consciousness: industrial work and rural migration in Southern Africa,

- 1860-1987”, *South African Historical Journal*, 33, 1995, pp. 194-215. T. D. Moodie, *Going for gold: men, mines and migration*, Berkeley, 1994. P. Harries, *Work, culture, and identity: migrant labourers in Mozambique and South Africa, 1860-1910*, Johannesburg, 1995. K. E. Atkins, *The moon is dead! Give us our money! the cultural origins of an African work ethic, Natal, South Africa, 1843-1900*, Portsmouth, 1993. E. T. Maloka, “Basotho and mines: towards a history of labour migrancy, 1890-1940” Ph. D. Thesis, University of Cape Town, 1995. マロカには、別稿がある。T. Maloka, “Missionary work and the Sotho in gold mine compounds, 1920-1940”, *South African Historical Journal*, 31, 1994, pp. 28-54. なお、W. G. James, “Grounds for a Strike: South African Gold Mining in the 1940s”, *African Economic History*, 16, 1987, pp. 1-22. も参照。
- 29) 石炭業については、B. Guest, “Commercial coal-mining in Natal: a centennial appraisal”, *Natalia*, 18, 1988, pp. 41-58. R. Edgecombe & B. Guest, “The black heart of the beautiful mountain: Hlobane colliery, 1898-1953”, *South African Historical Journal*, 18, 1986, pp. 191-221. を参照。ビル・ゲストには、次の興味深い論文がある。B. Guest, “The Natal regional economy, 1910-1960 in historical perspective”, *South African Journal of Economic History*, 5-2, 1990, pp. 16-39. B. Guest, “The KwaZulu-Natal regional economy in retrospect and prospect: a brief overview”, *South African Historical Journal*, 37, 1997. なお、トランスバール石炭業については、R. Mendelsohn, *Sammy Marks: the uncrowned king of the Transvaal*, Cape Town, 1991. を参照
- 30) H. Heydenrych, “Railway development in Natal to 1895”, in B. Guest & J.M. Sellers eds., *Enterprise and Exploitation in a Victorian Colony: aspects of the economic and social history of colonial Natal*, Pietermaritzburg, 1985. H. Heydenrych & R. A. du Plooy, “Railway development in Natal, 1910-1929”, in B. Guest & J. M. Sellers eds., *Receded Tides of Empire: aspects of the economic and social history of Natal and Zululand since 1910*, Pietermaritzburg, 1994. 南アフリカの工業化については、B. Freund, “The social character of secondary industry in South Africa, 1915-1945”, in A. Mabin ed., *Organization and economic change*, Johannesburg, 1988. を参照。
- 31) R. Christie, *Electricity, industry and class in South Africa*, Albany, 1984. N. L. Clark, *Manufacturing apartheid: state corporations in South Africa*, New Haven, 1994.
- 32) T. Cross, “Britain, South Africa and the Entente Internationale de l’Acier: the development of the South African iron and steel industry, 1934-1945”, *South African Journal of Economic History*, 9-1, 1994, pp.1-12. T. R.W. Cross, “The political economy of a public enterprise: the South African Iron and Steel Corporation, 1928-1989”, Ph. D. Thesis, University of Oxford, 1993. 南アフリカの通商史および関税問題については、以下の文献を参照。W. G. Martin, “The Making of an Industrial South Africa: Trade and Tariffs in the Inter-War Period”, *International Journal of African Historical Studies*, 23-1, 1990, pp. 59-85. W. G. Martin, “Regional Formation under Crisis Conditions: South vs Southern Arica in the Interwar Period”, *Journal of Southern African Studies*, 16-1, 1990, PP. 112-138. I. Phimister, “Secondary Industrialization in Southern Africa: the 1948 Customs Agreement between Rhodesia and South Africa”, *Journal of Southern African Studies*, 17-3, 1991. G. Maasdorp, “A century of Customs Union in South Africa, 1889-1989”, *South African Journal of Economic History*, 5-1, 1990, pp. 10-30. 両大戦間期におけるアフリカーナの資本蓄積およびナショナリズムの形成については、林 晃史「両大戦間期南アフリカにおけるアフリカーナーの資本蓄積と労働政策」(山田秀雄編著『イギリス帝国経済の構造』新評論、1987年、197~224ページ)および林 光一『イギリス帝国主義とアフリカーナー・ナショナリズム 1867-1948』創成社、1995年を参照。
- 33) I. Berger, *Thread of solidarity: women in South African industry, 1900-1980*, Bloomington, 1992. D. Duncan, “Foreign and local investment in the South African motor industry, 1924-1992”, *South African Journal of Economic History*, 7-2, 1992, pp. 53-81. なお、以下の文献も参照。J. Lewis, *Industrialization and trade union organization in South Africa, 1924-55*, Cambridge, 1984. E. Webster, *Cast in a racial mould: labour process and trade unionism in the foundries*, Johannesburg, 1985. P. Alexander, “Industrial Conflict, race and the South African state, 1939-1948”, Ph. D. Thesis, University of London, 1994.

- 34) D. Kaplan, *The crossed line: the South African telecommunications industry in transition*, Johannesburg, 1990. R. Crompton, *An industrial strategy for the commodity plastics sector*, Cape Town, 1995. A. Black, *An industrial strategy for the motor vehicle assembly and component sectors*, Cape Town, 1994.
- 35) M. Smuts, "The growth of Black business in South Africa", in R. Smollan ed., *Black advancement in the South African economy*, Johannesburg, 1986. ch.2. E. Preston-Whyte & C. Rogerson eds., *South Africa's informal economy*, Cape Town, 1991. J. Crush & C. Ambler eds., *Liquor and Labour in Southern Africa*, Athens, 1992.
- 36) 植民地期南アフリカの歴史に関しては、ケーガンの研究がまとまっている。T. Keegan, *Colonial South Africa and the origins of the racial order*, Cape Town, 1996. R. B. Beck, "The organization and development of trade on the Cape frontier, 1817-1830", Ph. D. Thesis, Indiana University, 1987. R. Bouch, "Mercantile activity and investment in the Eastern Cape: the case of Queenstown, 1853-1886", *South African Journal of Economic History*, 6-2, 1991, pp. 18-37. P. Wickins, "Pastoral proficiency in nineteenth century South Africa and Australia: a case of cultural determinism?", *South African Journal of Economic History*, 2-1, 1987, pp. 32-47. 18世紀から19世紀への転換期におけるケープ植民地経済史については、わが国では、以下の研究がある。浅田 実「G. マカートニーとケープ植民地」創価大学『比較文化研究』第16巻 1999年、5～31ページ、浅田 実「ナポレオン戦争時代のケープ植民地世界」創価大学『人文論集』第12号 2000年、71～102ページ。
- 37) J. N. C. Marincowitz, "Rural production and labour in the Western Cape, 1838 to 1882, with special reference to the wheat growing districts", Ph. D. Thesis, SOAS, University of London, 1985. W. L. Dooling, "Agrarian transformations in the western districts of the Cape Colony, 1838-1900", Ph. D. Thesis, University of Cambridge, 1996. A. Mabin & B. Conradie eds., *The confidence of the whole country: Standard Bank reports on economic conditions in southern Africa, 1865-1902*, Johannesburg, 1987.
- 38) 次の2冊の優れた論文集を参照。W. Beinart, P. Delius & S. Trapido eds., *Putting a plough to the ground: accumulation and dispossession in rural South Africa, 1850-1930*, Johannesburg, 1986. T. J. Keegan, *Rural transformations in industrializing South Africa: the southern highveld to 1914*, Basingstoke, 1987. ベルグの研究には、以下のものがある。J. S. Bergh, "Die Vestiging van die Voortrekkers noord van die Vaalrivier tot 1840", *Historia*, Pretoria, 37-2, 1992, pp. 38-47. J. S. Bergh, "Grondregte in Suid-Afrika: 'n 19 de eeuse Tranvaalse perspektief", *Historia*, Pretoria, 40-2, 1995, pp. 39-47.
- 39) E. A. Eldredge, *A South African kingdom: the pursuit of security in nineteenth-century Lesotho*, Cambridge, 1993. J. Lambert, *Betrayed trust: Africans and the state in colonial Natal*, Scottsville, 1995. インド系移民と彼等が形成した社会の歴史については、以下の諸研究を参照。V. C. Malherbe, "Indentured and unfree labour in South Africa: toward an understanding", *South African Historical Journal*, 24, 1991, pp. 3-30. B. Freund, *Insiders and outsiders: the Indian working class of Durban, 1910-1990*, Portsmouth, 1995. S. Bhana & J. B. Brain, *Setting down roots: Indian migrants in South Africa, 1860-1911*, Johannesburg, 1990. V. Padayachee & R. Morrell, "Indian merchants and dukawallahs in the Natal economy, 1875-1914", *Journal of Southern African Studies*, 17, 1991, pp. 71-102. 19世紀南アフリカの植民地経済の一端を知る文献については、次の諸研究を参照。商業史については、K. L. Harris, "Chinese Merchants on the Rand, 1850-1910", *South African Historical Journal*, 33, 1995, pp. 155-168. R. Bouch, "Mercantile activity and investment in Eastern Cape: the case of Queenstown, 1853-1886", *South African Journal of Economic History*, 6-2, 1991, pp. 18-38. がある。モヘア産業については、T. Pringle, "A history of South African mohair industry, 1838-1971", *South African Journal of Economic History*, 4-2, 1989, pp. 55-77. を参照。交通と輸送については、J. Inggs, "Early Port Elizabeth harbour development schemes, 1820-1855", *South African Journal of Economic History*, 6-2, 1991, pp. 38-71. G. H. Perie, "Slaughter by Steam: Railway Subjugation of Ox-Wagon Transport in Eastern Cape and Transkei, 1886-1910", *International Journal of African Historical Studies*, 26-2, 1993, pp. 319-343. を参照。また、ケープにおけるジェントリーの興隆については、R. Ross, "The Rise of the Cape Gentry", *Journal of Southern African Studies*, 9-2, 1983, pp.

193-217. C. C. Crais, "Gentry and labour in three Eastern Cape districts, 1820-1865", *South African Historical Journal*, 18, pp. 125-146.を参照。

- 40) P. Van Duin & R. Ross, *The economy of the Cape Colony in the eighteenth century*, Leiden, 1987.
- 41) 17世紀から18世紀にかけてケープ植民地を分析した研究としては、L. Guelke, "The Anatomy of a Colonial Settler Population: Cape Colony, 1657-1750". *International Journal of African Historical Studies*, 21-3, 1988, pp. 453-473 を参照。N. Worden, *Slavery in Dutch South Africa*, Cambridge, 1985. R. C. -H. Shell, *Children of bondage: a social history of slave society at the Cape of Good Hope, 1652-1838*, Johannesburg, 1994.なお、ケープ植民地の奴隷制については、G. Cuthbertson, "Cape slave historiography and the question of intellectual dependence", *South African Historical Journal*, 27, 1992, pp. 26-49. N. Worden, "Diverging histories: slavery and its aftermath in the Cape colony and Mauritius", *South African Historical Journal*, 27, 1992, pp. 3-25. F. Morton, "Slave-Raiding and Slavery in the Western Transvaal after the Sand River Convention", *African Economic History*, 20, 1992, pp. 99-118.を参照。
- 42) A. Bank, *The decline of urban slavery at the Cape, 1806-1834*, Cape Town, 1991. R. S. Viljoen, "Khoisan labour relations in the Overburg districts during the latter half of the 18th century, 1755-1795", M.A.Thesis, University of Western Cape, 1993. E. A. Host, "Capitalization and proletarianization on a Western Cape farm: Klaver Valley 1812-1898", M.A. Thesis, University of Cape Town, 1992.
- 43) 以下の諸研究を参照。N. Worden & C. Crais eds., *Breaking the chains: slavery and its legacy in the nineteenth-century Cape Colony*, Johannesburg, 1994. E. A. Ludlow, "Missions and emancipation in the south western Cape: a case study of Groenekloof (Mamre), 1838-1852", M.A. Thesis, University of Cape Town, 1992. R. Ross, "'Rather mental than physical': emancipation and the Cape economy", in N. Worden & C. Crais eds., *Breaking the chains: slavery and its legacy in the nineteenth-century Cape Colony*, Johannesburg, 1994, ch. 6. M. I. Rayner, "Wine and slaves: the failure of an export economy and the ending of slavery in the Cape Colony, South Africa, 1806-1834", Ph. D. Thesis, Duke University, 1986. J. E. Wilson, "A changing rural economy and its implications for the Overberg, 1838-1872", Ph. D. Thesis, University of South Africa, 1990.
- 44) 以下の学位論文を参照。J.N.C. Marincowitz, "Rural production and labour in the Western Cape, 1838 to 1882, with special reference to the wheat growing districts", Ph. D. Thesis, University of Cape Town, 1995. W. L. Dooling, "Agrarian transformations in the western districts of the Cape Colony, 1838-1900", Ph. D. Thesis, University of Cambridge, 1996. P. Scully, *The banquet of freedom: social and economic relations in the Stellenbosch district, South Africa, 1870-1900*, Cape Town, 1990.ところで、コイサンは、すでに1710年代から奴隷労働として重要であった。彼等は、オーバーバーグの農業労働者のうちで多数を構成していたために、1828年の彼等の解放は、しばしば奴隷の解放と同様に制限された。(E. Elbourne, "Freedom at issue: vagrancy legislation and the meaning of freedom in Britain and the Cape colony, 1799 to 1842", *Slavery and Abolition*, 15-2, 1994, pp. 114-150.) このような人々の奴隷化と農奴化は、1790年代以後オレンジ川を越えて拡大し、後には南アフリカ共和国にも広がり、少なくとも1870年まで残ったようである。(E. A. Eldredge & F. Morton eds., *Slavery in South Africa: captive labour on the Dutch frontier*, Boulder, 1994.) コイサンは、東と北ではバンツ系の人々の圧力の下に置かれていた。(P. Jolly, "Interaction between south-eastern San and southern Nguni and Sotho communities, 1400-1880", *South African Historical Journal*, 35, 1996, pp. 30-61.) 彼等自身は、インド洋商業、とくに象牙の取引にかかわった人々の影響をうけていた。ポルトガルからのメイズの採用は、バンツの人口増加の考古学的証拠となる。また、「ムフェカネ」として知られている大変動は、19世紀初期の飢饉への敏感な反応として説明されることも可能であろうが、これについての別の理由は、ケープのフロンティアを越えた奴隷化の拡大であった。(C. Hamilton ed. *The Mfecane aftermath: reconstructive debates in southern African history*, Johannesburg, 1994.)
- 45) 以下の諸論稿を参照。B. A. le cordeur, "The South African Historical Journal and the periodical literature on South African history", *South African Historical Journal*, 20, 1988, pp. 1-16. C. Saunders & B. Le Cordeur,

- “The South African Historical Society and its antecedents”, *South African Historical Journal*, 18, 1986. A. Bank, “The Great Debate and the Origins of South African Historiography”, *Journal of African History*, 38-2, 1997, pp. 261-281. C. Saunders, “The Writing of C. W. De Kiewiet’s A History of South Africa, Social and Economic”, *History in Africa*, 13, 1986, pp. 323-330.
- 46) 両者のテキストとは、以下のものである。J. Natrass, *The South African Economy: its growth and change*, Cape Town, 1981. F. L. Coleman, ed., *Economic History of South Africa*, Pretoria, 1983.
- 47) たとえば、S. Jones & A. Muller, *The South African Economy, 1910-90*, Basingstoke, 1992.などがこの立場をとっている。
- 48) たとえば、南アフリカのアーカイブについては、H. M. Feinburg, “Research in South Africa: to Know an Archive”, *History in Africa*, 13, 1986, pp. 391-398. H. C. Jones, “Resources at the Institute for Contemporary History, University of the Orange Free State”, *History in Africa*, 20, 1993, pp. 409-411. を参照。「リベラル派」と「ラディカル派」の論争については、C. Saunders, *The Making of the South African Past: major historians on race and class*, Cape Town, 1988.を参照。これに対して、ナタールの歴史家たちは、別個のアジェンダを求めているという印象がある。次の編著を参照。B. Guest & J.M. Sellers eds., *Enterprise and Exploitation in a Victorian Colony: aspects of the economic and social history of colonial Natal*, Pietermaritzburg, 1985. B. Guest & J.M. Sellers eds., *Receded Tides of Empire: aspects of the economic and social history of Natal and Zululand since 1910*, Pietermaritzburg, 1994. なお、ナタール大学歴史学科の *The Journal of Natal and Zulu History* に掲載されている諸論文を参照。また、ケープタウンの歴史家たちは、旧ケープ植民地時代の資料を利用して、17世紀から19世紀までの歴史の研究や奴隷制とその余波についての研究を蓄積している。
- 49) 以下の文献を参照。B. Bozzoli, *Women of Phokeng: consciousness, life strategy, and migrancy in South Africa, 1900-1983*, Portsmouth, 1991. P.F. Scully, *Liberating the Family? Gender and British Slave Emancipation in the Rural Western Cape, South Africa, 1823-1853*, Portsmouth, 1997. P. Van der Spuy, “Slave Women and the Family in nineteenth-century Cape Town”, *South African Historical Journal*, 27, 1992, pp. 50-74.
- 50) 少なくとも英領アフリカ植民地の政府報告と各部局の報告書のマイクロ化が急がれるべきであろう。南アフリカに関しても1910年の連邦化までのケープとナタールの植民地政府関係資料の整備が待たれる。また、植民地関係資料とイギリス議会資料をつなぐ総合的な資料研究も必要である。